解説・報告

—海外で活躍する獣医師（Ⅵ）—

国際連合食糧農業機関（FAO）で過ごした3年間

須藤加澄[†]（農林水産省畜産局畜産振興課）

1 はじめに

私は，2021年1月から2023年12月まで，農林水産省の「越境性動物疾病対策国際活動強化事業」の下，国際連合食糧農業機関（FAO）の動物生産・衛生部に赴任した．動物衛生に関する国際機関としては，やはり国際獣疫事務局（WOAH）が代表的ではあるが，FAOでも「飢餓と闘うための国際的な取組みを主導する国連の専門機関」として，畜産や動物衛生に関するガイドラインの作成やイベント・ワークショップの開催等，WOAHや世界保健機関（WHO），国際原子力機関（IAEA）といった他の国際機関と連携しつつ，各国に畜産や動物衛生に関する支援を行っている．WOAHが国際基準の策定や地域レベルの活動を行っているのに対し，世界のほとんどの国に事務所を持つFAOは，国レベルでの活動や支援を得意とする点が大きな違いであろう．

もともと，私が農林水産省に入省した理由の一つが，仕事で海外に行ってみたい，できれば1度は住んでみたいという思いを持っていたからだった．また，本事業での派遣職員の公募があった2020年春，私は農林水産省動物医薬品検査所で勤務しており，豚熱ワクチンをはじめとする動物のウイルスワクチンに係る検定検査や研究に携わって3年目となっていた．こうした背景もあり，派遣職員に応募し，幸運なことに派遣者に選ばれたという次第だ．

この「越境性動物疾病対策国際活動強化事業」では，FAOの動物生産・衛生部にある「危機管理センター（Emergency Management Centre，以下，EMC）」と「FAO-WOAH牛疫事務局」という2つのチームの活動を支援しており，私もそれらチームの一員として勤務していたため，本稿では，主にその2チームの業務について紹介させていただく．

これまでの執筆者の方々は，読者の皆様に国際的な仕事を具体的かつ魅力的に語られているが，今回の私の話は，ただの体験談になってしまうかもしれないことをご容赦いただきたい．

FAOの屋上

2 EMCでの仕事

EMCは主に口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザといった越境性動物疾病が発生した国や災害・紛争等により発生している動物疾病への対応が十分にできない国への支援，またはそうした事象に備える能力向上のための支援を行うチームである．EMCの活動は4つの柱—① Preparedness（準備），② Response（対応），③ Coordination（調整）及び④ Collaboration and resource mobilization（協力と資源動員）で構成されている．① Preparednessとして行っていたのは，例えば，動物衛生関係の緊急事態に備えるためのガイドラインやツールの作成，それらを活用したワークショップやトレーニングの実施により，動物疾病等の緊急管理に係る各国の準備態勢を強化するための支援をすることだ．② Responseとして行っていたのは，疾病発生時の緊急事態に対応し，リスクや影響を受ける国々を支援することであり，ミッション（技術的な助言を行う専門家チームの派遣）を行うことが主であった．③ Coordinationとしては，動物衛生に係る地域または国際的な活動の調整をリードすることを行っており，FAOの地域事務所

† 連絡責任者：須藤加澄（農林水産省畜産局畜産振興課）
〒100-8950 千代田区霞が関1-2-1 ☎03-3502-8111 E-mail : kasumi_sudo180@maff.go.jp

や各国の事務所，WOAH や IAEA 等の他組織と，疾病や紛争等，さまざまなトピックについて継続的に情報共有し，何らかの支援が必要となりそうな状況があれば，FAO 内外のチームや組織と連携しつつ支援を提供したり，それらのチームや組織が連携できるように関係性を調整したりしていた．④ Collaboration and resource mobilization としては，動物疾病の緊急事態を適切かつ効果的に管理するための協力ネットワークを強化するため，EMC の活動をサポートするドナーとなってくれる国や組織を探したり，資金を拡大できるように広報活動を行っていた．

主に私が関わっていた活動は② Response だったので，そこで経験した一つのミッションについて紹介したい．それは，ある越境性動物疾病の対応のため，私が初めてコーディネーターとして関わったミッションだった．

通常，ある国から FAO の動物生産・衛生部に支援の要請が来たら，まずどのような支援が必要か FAO 本部，地域事務所及び要請国の FAO 事務所における関連するチーム間で協議し，その結果，ミッションが必要となれば，EMC によるミッション派遣に関する手続きが開始となる．ミッションは，緊急時対応のために要請されるので，要請国にとって一番早く受け入れ可能な時期に，約 1 週間から 10 日の旅程で実施されることが多い．EMC はミッションの計画，専門家チームの派遣，専門家チーム派遣後の報告会開催及び要請国への報告書の提供までを主導し，必要に応じて，長期的な支援のために FAO 内の他チームに引き継いだり，要請国とその国を支援してくれるドナー国を繋ぐ役割をしていた．計画段階では，要請国の FAO 事務所や FAO 本部の他チームと議論しつつ，ミッションの目的を確定，企画案を作成し，専門家チームの構成や旅程を決定する．要請国にとって一番早い時期に実施する必要があるため，専門家を見つけることは時に困難で，専門家チームが構成された後も，残りの手続きがスムーズに進むことはほぼなかった．日本人であれば，多くの国へビザなしで渡航できるが，他の国の人たちは違う．また，派遣許可を得るために必要な FAO 組織内の決裁では，緊急時対応だからといって，決裁ルート上の全員が急いでくれるわけではない．そのため，各専門家のビザや航空機の問題，FAO 組織内の決裁等の関係で，派遣直前まで予定通り派遣できるかわからないというのが常であった．

結果的に予定通り派遣されたものの，初めての私のミッションも例に漏れず，金曜日の夕方 5 時に派遣許可が下り，航空券を購入，翌日の夕方には要請国に到着，その翌日の日曜日の朝から活動開始という旅程であった．準備がバタバタだったので，空港からホテルへ向かう道すがら見た夕日に浮かぶ街の景色は，日本ともローマとも全く異なり，とても不思議な気分だったのを覚えている．

大抵，ミッションはその国の首席獣医官（CVO）等への挨拶で始まり，その後，フィールドに出て視察と聞き取りを行い，最後，再び CVO をはじめとする獣医当局の担当者に対し，報告を行うという流れとなる．このミッションでも，1 日目には農業省の獣医当局を訪れ，CVO や動物衛生・畜産関係の担当官に挨拶し，その国において対策を必要としている疾病の発生状況から畜産，動物衛生に関するあらゆる情報について聞き取りを行った．それから，2 日目から 4 日目に，同疾病の非発生地域と発生地域両方における獣医当局，農場や市場，生体輸入業者，国の検査研究機関を訪れ，施設の視察や関係者への聞き取りによる情報収集を行い，現状や問題点等について洗い出しを行った．最終日である 5 日目，専門家チームは再び農業省を訪れ，ミッション中に見つかった問題点とその改善方法，そして改善方法を実行するための短期・中期・長期の行動計画について CVO 等に提案した．

派遣国にもよるが，さまざまな場所を見て回るため，ミッション期間中は，かなりの距離を移動する．また，ほぼ毎日 FAO 本部の同僚たちに進捗状況の報告をしたり，最終日の報告のためのプレゼン準備をしたりしなければならないから，文字通り 1 日中働いていた．FAO では普段，時間外勤務なんてないけれど，出張中こそ働くというのは，農林水産省と FAO の違いかもしれない．

これが初めてのミッションということもあったから，経験することすべてが新しかった．例えば，特有の食文化．その国では，食事を手づかみで食べる習慣があったから，当時のコロナ禍なんて関係なく，みんな大皿に盛られた食事をシェアし，手づかみで食べていた．もともと，私は他人が箸をつけたものを口にすること自体好きではないのだが，郷に入っては郷に従えという精神で食べた食事は，どれもとても美味しかった．また，新たな経験とともに考えさせられることも多かった．その一つが，家畜の防疫と規制の状況．その国では，近隣の国から生体を入れ，そのまま農家に販売しており，話を聞く限り「検疫」というものはほとんど行われていなかった．また，業者が違法に動物用医薬品を輸入し，販売するということが普通に行われていた．当時，国に認められたワクチンが手に入らないから，農家はどこでどのように製造されたかも不明なワクチンを業者から購入して使用するということが横行しており，ワクチンを接種しても効かない，一見効いたように見えてもしばらくして問題が生じる，そんなことがよく起きているようだった．それから，国の検査研究機関で見たのだが，検査のため，農場から生きた動物が軽トラの荷台に乗せられて運ばれてきていた．聞いたところによると，「地方の検査所には検体を採材するための資材がない．近くの都市であれ

EMC のメンバー

ば，中央の研究所まで動物をそのまま運ぶんだ」とのことだった．お金がないから，そうする以外に方法はないのだろうか．何だか違和感があったが，その場では特に何も言えなかった．そして，同じ検査研究機関でのことだが，ある１室に複数の使用されていない大型冷凍庫や真新しい安全キャビネットが置かれていた．よくよく聞くと，それらの機器は国際機関や近隣の国々の支援によって導入されたが，その国の規格に合わなかったり，メンテナンスできなかったりといった理由で，使用できない，または使用できなくなったものとのことだ．支援を受ける側は，差し出されるものを受け取ることしかできないのだろうか．何だかモヤモヤした．

夜な夜な行われる専門家チームのミーティングを通じて，やはり全員同じようなことに疑問を持っているのだとわかったが，議論となったのは，そうしたことはどこまで国に伝えるべきなのか，どうしたら納得してもらえるのかということだった．専門家チームは，国際機関として国のやり方に口を出すことになるのである．何をどこまでどのように伝えるのかは，とても難しい問題だった．結局，経験豊富なリーダー格の専門家が上手くまとめ，報告会も納得し，感謝してもらえる形で終わったが，その姿を見て，必要なことをきちんと伝えるためには，やはり理論立てて説明できるほどの深い知識といろいろな国の実情を考慮できるほどの経験が必要なのだと思い知った．正直，このミッションで私が貢献できたことはほとんどなかっただろうが，自分自身が学んだことは多かったと思う．

後日談だが，帰国した日，一緒にミッションに参加していた専門家の１人から，コロナ感染していたと連絡があった．思い返せば最終日，彼女は体調が悪そうだった．帰国のためのコロナ検査ではネガティブだったから，全員無事に帰国はできており，幸い私はその後，何もなかったのだが，「郷に入っては～」というものは，時と場合によると思った．

話は変わるが，EMC 全体の雰囲気としては，賑やかで国際色豊かで，アメリカのホームドラマに出てきそうな人やいつもよくわからないジョークばかり言っている人など，全員キャラが濃かった（静かに淡々と仕事をしていた私は，逆にキャラ立ちしていたのかもしれない）．また，英語の他にフランス語やスペイン語を話せる人ばかりで，支援する対象の国によっては，会議がすべてフランス語やスペイン語になることも普通だったから，英語だけやっとわかる私には，ちんぷんかんぷんな会議も多かった．それでも，みな意見やアイデアをちゃんと聞いてくれ，私に仕事を任せ，上手くできるとみんなで評価してくれる，とても居心地の良いチームだった．

3　FAO-WOAH 牛疫事務局での仕事

牛疫は，2011 年，FAO 及び WOAH（当時 OIE）により撲滅が宣言された，人類が根絶を達成した世界で 2 番目の疾病である．牛やめん羊，山羊，豚など偶蹄類動物が感染し，高い罹患率と高い死亡率が特徴である．日本での最後の発生は 1922 年で，世界的には 2001 年にケニアでの発生が最後である[1]．WOAH が設立された理由が，牛疫のコントロールのためであったという点からも，いかにこの疾病が重大なものであったかがわかる．

2011 年に牛疫の撲滅が宣言されたといっても，世界各国では研究等のために牛疫ウイルスや牛疫ワクチン等の牛疫ウイルス含有物質が保管されており，研究所からの事故または故意によるウイルスの流出の可能性が残されていた．これらによる牛疫の再興を防止するための戦略を策定・調整するため，2012 年，FAO と WOAH 共同で設立されたのが FAO-WOAH 牛疫事務局である．現在，FAO-WOAH 牛疫事務局は，そうした牛疫ウイルス含有物質の完全廃棄を最終目標に，各国に保管されている牛疫の廃棄または FAO と WOAH がその保持を認めた牛疫保持施設に隔離することを目的とした活動を進めている［2］．

2024年現在，牛疫保持施設は，世界で6カ国7施設（日本，アメリカ合衆国，イギリス，エチオピア，中国，フランス）存在しており，中でも日本の農研機構動物衛生研究部門（以下，動衛研）は，牛疫ワクチンを定期的に製造している世界で唯一の機関である（日本は，ウイルス保持とワクチン株保持でそれぞれ施設認定を受けている）．なお，農林水産省の前述「越境性動物疾病対策国際活動強化事業」では，動衛研において，牛疫の発生時に緊急的に支給される国際備蓄ワクチンを製造・保管する活動も行っている．

また，FAO及びWOAHが認めていないにも関わらず，牛疫ウイルス含有物質を保管する国も，かなり数は減ったものの，依然として数カ国ある［3］．

私が赴任中にFAO-WOAH牛疫事務局として行っていたことは，動衛研における国際備蓄ワクチンの製造・保管に係る活動のサポートの他，FAOとWOAHの許可なく牛疫ウイルス含有物質を保管する国々に，その廃棄を提唱することや，牛疫についての知見を絶やさないための広報物の作成等であった．

牛疫関係の業務で経験したことは，すべて「ポリティカル・イシュー」の一言で片づけられるのだが，個人と個人，組織と組織のさまざまな思惑が錯綜し，はっきり言って面倒なことが多かった．また，多様な国籍の人が議論に関わるからか，プロフェッショナルとは言い難い口論が目の前で繰り広げられることも少なくなかった．

とても記憶に残っている会議がある．それは，ある国が許可なく保有している牛疫ウイルス含有物質を廃棄しようとしているという事前情報を得て，FAOとWOAHの牛疫担当の他，WOAHの副事務局長とFAOのCVOを交え，廃棄に向け正式に議論しようということで開催されたオンライン会議だった．会議当日，定刻にFAO-WOAH側は全員揃っていたが，その国のトップであるCVOはかなり遅刻して現れた．それから開口一番に「牛疫ウイルス含有物質を廃棄するつもりはない．これからも保持できるように支援してほしい．」と言ったのだ．確かに牛疫保持施設はあるが，申請されたからといってどんな国でも認めるわけではなく，相応の施設やシステムを持つ国でなければ認められない．それまでもずっと牛疫についての対話を続けてきていたから，その国のトップはその手続きもFAOとWOAHの考えも知っているはずだった．その一言を聞いた瞬間，FAO-WOAH側全員の表情が凍りつき，それら組織をリードするような立場の人たちが言葉を失った．その後，FAO-WOAH側は，なんとか説得しようと試みたが，意見は変わらなかった．結局，予定より早くその会議は終了した．あの時の何とも言えない気まずい空気は，今後も忘れることはないだろう．と同時に，きっとこれが国際交渉というものなのだろうと思う．

そうした日々を過ごす中で，私自身，上司間や組織間の板挟みとなり頭を悩ませる日も多かった．上手く立ち回ることもできず，時に迷惑をかけながら，1人もがきながらなんとか進めていた気がする．ただ，良かったことも多かった．EMCと違い，FAO-WOAH牛疫事務局は，人数が少なかった分，任される仕事は多くやりがいがあった．また，この仕事を通じて，いかに日本人が牛疫の撲滅に貢献したのかを知ることができた．牛疫という疾病について，今はほとんど学校で習わないだろうが，牛疫関係の資料では日本人の功績を目にすることが多く，同じ日本人として誇らしかった．そして，牛疫撲滅10周年を記念するアニバーサリーイベントの開催，牛疫に関するガイド［4］の公表等に携わることができた．自分が携わった仕事の成果が形になることは，大変うれしいものだった．

4　ローマでの生活

私が派遣された当初は，赴任地であるローマはちょうどロックダウンをしている最中で，スーパーや薬局，病院へ行くといった日常生活を送るうえで必要最低限の行動のためにしか外出はできず，外出の際は，外出理由等を記載した宣誓書のようなものを携帯しなければならなかった．犬の散歩は正当な理由として認められており，宣誓書を見るまでもなく明らかな行動だったため，私を含め，多くの人が近所の知人・友人から犬を借りて散歩に行ったものだった．仕事の面でも，コロナ禍の間，FAOでは公共交通機関を利用しての通勤は禁止，通勤してよい人数は1部門で1日あたり10人までといったルールがあったから，赴任してから数カ月，同僚と直接顔を合わせることは，ほぼなかった．けれども，ネガティブな思いばかりをしたというわけではない．コロッセオやトレヴィの泉，スペイン広場といった観光名所を人がほとんどいない状況でゆっくりと観賞することができ，イタリア軍病院に設置されたテントでコロナのワクチンを接種するという，滅多にできない経験をすることもできた．

コロナの規制が緩和されてからは，イタリア国内だけでなく，EU圏内の国も含め，いろいろな場所を旅行した．電車でバルセロナからニース，モナコ，ジェノバ，ミラノを経由しローマに帰ってくる横断旅行，ミュンヘンからザルツブルク，ボルツァーノを経由しローマに戻る縦断旅行，ローマで生活していなければ思いつかなかった旅だろう．また，ローマ市内でも美しい景色は沢山あった．FAOの屋上からコーヒー片手に見るチルコ・マッシモ，小高い丘から見る夕日とサン・ピエトロ寺院，月明かりに浮かぶコロッセオ．何度見ても素晴らしく，見ればどんな悩みも忘れ去ることができた．

また，ローマで生活する中で，日本の素晴らしさも実

ローマのピザ

感できた．日本では，宅配便は日時指定をしたら，必ずその日時に届けられる．カフェのトイレで便座がないなんてことはありえない．夜のタクシーで法外なぼったくりにあうことはなく，道端でミサンガをいきなり渡され，お金を要求されることもない．数えだしたらキリがないくらい，日本の良さは溢れている．さらに，FAOには，同じ農林水産省から出向してきている職員が沢山いた．全員，異なる専門分野出身ではあったが，出向者という同じ立場で悩んでいることは似通っており，なにより同じ感性を持っていたから，彼らとの話は共感しあえることが多く，自分自身救われることも多かった．

ローマ生活に関し，最後に言及すべきは，グルメについてだろう．まずは，やはりパスタが美味しい．イタリアは，どの都市もその地域特有のパスタがあり，ローマと言えば，アマトリチャーナとカルボナーラが代表だ．ローマ以外の街でもさまざまなパスタを食べたが，特にジェノバで食べるジェノベーゼ，ボローニャで食べるボロネーゼは格別だった．また，イタリアではピザは１人1枚丸々食べるのが当たり前．ローマのピザは薄いから，自分の顔の２倍以上あるのではないかという大きさのピザでも意外とペロリと食べられた．他にも，生ハムやパルミジャーノ・レッジャーノ，トリッパに，カルチョーフィ，ズッキーニの花等，日本ではなかなか食べられない料理も沢山あった．日本と違い，安くて美味しいものは見つけることが難しかったが，現地で食べるイタリア料理は，どれもとても美味であった．

5 さ い ご に

本稿では，思ったことや感じたことをつらつら綴ってきたが，今思うのは，FAO に赴任できて，本当に良かったということだ．FAO での経験は，３年間という短い期間をとても濃密なものにしてくれ，楽しかったことも大変だったことも，今ではすべて良き思い出だ．FAO にいる時は，自分で考える時間を沢山持てたが，現在は，降ってくる仕事をこなすので一杯一杯の毎日．日本に帰ってきて１年が経ち，時折思いだす FAO で過ごした日々は夢のようで，大変貴重な体験をさせてもらえたのだと実感する．

最後に，この場をお借りして，FAO への派遣前から派遣中まで，さまざまな形で私をサポートしてくれたすべての関係者の皆様に，心より深くお礼申し上げたい．

参 考 文 献

［1］ 畜疾病図鑑 Web 牛疫，農研機構動物衛生研究部門（2021），（https://www.naro.affrc.go.jp/org/niah/disease_dictionary/houtei/k01.html），（参 照 2024-12-10）

［2］ Myers L, Metwally S, Marrana M, Stoffel C, Ismayilova G, Brand T : Global Rinderpest Action Plan – Post-eradication, Second edition, FAO and WOAH (2024), (https://openknowledge.fao.org/handle/20.500.14283/cc9269en), (accessed 2024-12-10)

［3］ 13th Meeting of the Global Steering Committee of the Global Framework for the Progressive Control of Transboundary Animal Diseases (GF-TADs), FAO and WOAH (2023), (https://openknowledge.fao.org/server/api/core/bitstreams/dc6a3cc5-1a5a-454c-b6f5-e3e2ca8a96a4/content), (accessed 2024-12-10)

［4］ Metwally S, Weber S, Jacob S, Sudo K : Rinderpest – A pocket guide for veterinary students and graduates, FAO (2024), (https://openknowledge.fao.org/handle/20.500.14283/cc5189en), (accessed 2024-12-10)